

老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題

原沢 優子¹, 松岡 広子¹, 星野 純子¹, 宮下 美香², 濱畑 章子¹

Outcomes and Improvements of Experiential Learning for Teaching of Nursing Students in Gerontology

Yuko Harasawa¹, Hiroko Matsuoka¹, Junko Hoshino¹, Mika Miyashita², Akiko Hamahata¹

キーワード：高齢者理解, 体験学習, 老年看護学, 教育方法, 自己への気付き

I. はじめに

高齢者看護を実践する場合、看護を行う側が高齢者に対してどのような感情を抱いているかということが、その心理や姿勢に影響すると考えられる。学生は、それまでの経験や見聞した知識によって構成された感情を高齢者に対して持つだろうが、それは、高齢者をよく理解した上で形成されているとは限らない。

世代が大きくかけ離れ、高齢者との接触が少ない家族形態を持つ学生に対して、老年看護学では高齢者理解に向けた様々な工夫が見られる¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。その中でも高齢者理解の初期段階として、高齢者疑似体験による教育実践の報告ではいくつかの学習効果が挙げられている。その効果は、高齢者の身体的な特徴についての実体験を行うことで身体的特徴への理解が深まるだけでなく、高齢者の心理や自己の高齢者像へ気づきが及ぶことである¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。さらに、被援助者と援助者体験の両方を相互的に体験することによって、ケアをされる立場の心理や介護家族の負担感への思慮など学生の考察が深まることも報告されている⁵⁾。このように、高齢者に対する情緒的な理解が深まることによって、高齢者に対する肯定的な解釈が増え⁶⁾、高齢者看護を担う人材育成に体験学習はその効果が期待できる。

本学の老年看護学においても、学生の高齢者理解に向けて高齢者疑似体験、杖歩行疑似体験、片麻痺がある場合を想定したベッドからの車椅子移乗についての体験学

習をこれまで行ってきた。平成15年度の体験学習ではあらたに、老年看護学実習で学生の理解が不足していると感じられたリハビリテーション期の清拭と義歯を使用する人への援助の2種の体験学習を加え、5種の組み合わせで体験学習を実施した。このような体験学習の取り組みについて評価した報告はみあたらない。そこで本稿では、平成15年度に実施した体験学習の学習効果と課題について検討した結果を報告する。

II. 目的

本学で実施した高齢者理解に向けた体験学習の学習効果を検討すること、および、高齢者理解を深める今後の教育課題を探ること。

III. 体験学習の実施方法

1. 体験学習実施の目的

- 1) 学生が高齢者を主体的にとらえ理解を深めることができる
- 2) 学生が援助側と被援助側の双方の立場から高齢者看護をとらえられる視点を養う
- 3) 学生が高齢者看護に向けた新しい気づきを得られる

2. 対象

平成15年度2年次生82名（老人看護学概論30時間履修中の学生）

¹愛知県立看護大学（老年看護学）、²広島大学大学院保健学研究科

3. 期間

平成15年11月14日～12月19日

老人看護学概論内の3コマ（6時間）

4. 学習項目と学習目標

体験する学習項目は次の①～⑤に設定した。①高齢者疑似体験（膝関節硬化と変形の体験装具、視界体験眼鏡、片麻痺体験装具、重錘バンドを使用）、②杖歩行疑似体験と杖歩行の援助（多種類の杖と歩行補助具を使用）、③車椅子を利用して高齢者をベッドから移動・移乗する援助（車椅子とベッドを使用）、④リハビリテーション期にある高齢者への清拭（清拭用具一式、入浴剤、皮膚保護ローションを使用）、⑤義歯を使用している高齢者への援助（有床総義歯上下、歯列モデル、義歯用ブラシ、義歯洗浄用容器、義歯洗浄剤を使用）。

学習項目ごとに設定した学習目標を表1に一覧した。学生自身における目標への自己評価は、すべての体験学習が終了した後にレポートにまとめ提出させた。

5. 実施方法

対象となる82名を41名ずつの2グループ（A, B）に分け、41名ずつ体験学習を実施した。体験学習の実施スケジュールは表2のとおりである。また、各体験学習の進行と時間配分については表3に一覧を示した。各表中の①～⑤は、体験学習項目の番号と対応している。また、授業時間内に十分な体験が行えなかった場合には、授業時間外に教員が体験学習の指導に当たることを説明した。

6. 体験学習実施における学生の安全性の確保

高齢者疑似体験装具、片麻痺体験装具については、装具着用により通常の動きが困難になることが予測された。学生に転倒などによる事故の可能性がある点を考慮して、体験学習は段差のない安全な環境で実施した。また、学生には、重心の変化による転倒の可能性をデモンストレーション実施時に説明し、学生自身が安全に体験学習を進行できるように注意を促した。

また、杖歩行疑似体験では、杖の正しい使い方として、身長に合わせた杖の長さや持ち方を学習する。この時、学生は比較対照として正しくない長さや使い方を合わせて体験するため、これが事故につながる可能性が予測された。これについては、杖の長さが適正でない場合は、段差のない場所でのみ体験するように徹底した。さらに杖を使用した階段の昇降については、正しい使い方をした場合においても転落などの危険が予測されたため、必ず教員が1名は付き添うことを条件として行った。

IV. 評価方法

1. 対象および方法

体験学習を受講した学生82名を対象とした。全体験の学習終了時に授業評価を目的として作成した自記式質問紙を配布し、約1ヵ月間の留め置きとした。倫理的配慮として、調査目的と方法、学生個人の人権擁護の観点から匿名性、プライバシー保護、調査への参加については自由意志の尊重を行うこと、調査参加による不利益がないことを説明し協力を依頼した。回収には、回収箱を設置した。

表1 学習項目ごとに設定した学習目標

学習項目	学習目標
①高齢者疑似体験	高齢者の身体的特徴を理解する。
②杖歩行疑似体験と杖歩行の援助	杖歩行の原理、使い方を知り、高齢者の杖歩行への援助について考えることができる。
③車椅子を利用して高齢者をベッドから移動・移乗する援助	高齢者の移動・移乗援助には、状況と看護目標によって援助技術を使い分ける必要があることを理解できる。 一つ目として、「高齢者の日常生活自立を支援する場合の援助」について知り、それを体得できる。 二つ目として、「高齢者の身体的負担の軽減を必要とする場合の援助」について知り、それを体得できる。
④リハビリテーション期にある高齢者への清拭	加齢と疾患、入院前後の生活、高齢者の希望を考慮したリハビリテーション期にある高齢者への清拭の方法と留意点を理解する
⑤義歯を使用している高齢者への援助	加齢による口腔の変化、義歯を使用している高齢者へのケア、義歯の手入れについて理解する

表2 体験学習の実施スケジュール

	11月14日	11月21日	11月28日	12月5日	12月12日	12月19日
A	講義	体験学習 ①②	講義	体験学習 ③	講義	体験学習 ④⑤
B	体験学習 ①②	講義	体験学習 ③	講義	体験学習 ④⑤	講義

表3 体験学習の進行と時間配分

学習項目	進行	時間 単位:分
①高齢者疑似体験 ②杖歩行疑似体験と杖歩行の援助	1.学習のオリエンテーション ・本日の学習目標の確認 ・学習進行についての説明 ・配布資料の確認	10
	2.高齢者疑似体験および杖歩行疑似体験のデモンストレーション ・学生1名を高齢者役、教員1名を看護者役、教員1名が解説者として実施 ・高齢者疑似体験装具着用の方法と体験における留意点の説明 ・杖歩行の方法と体験における留意点の説明 ・安全な体験学習を実施するための約束事の確認	20
	3.体験時間 ・各自が体験装具を用いて体験学習を実施 (実習室4および講義棟5階から6階に上がる階段にて実施)	50
	4.更衣	10
③車椅子を利用して高齢者をベッドから移動・移乗する援助	1.学習のオリエンテーション ・本日の学習目標の確認 ・学習進行についての説明 ・配布資料の確認	15
	2.体験時間 ・学生を4名程度のグループにわけ、 ・ベッド2台を利用して教員が1名ずつ配置して指導する ・高齢者役1名、援助者役1名、援助者役へのアドバイザー役2名が順に各役割を交代するように説明し学習をすすめる ・高齢者役には、片不全麻痺の場合、片完全麻痺の場合、全身衰弱の場合、リハビリテーション後期の場合の想定課題を提供し、その状況にあわせ援助者役は援助を工夫する ・各役割に課題が設定されており、学生はお互いの役割を実施後には、感想や意見を述べあい相互的に学習を深める。 ・安全な体験学習を実施するための約束事の確認	70
	3.更衣	5
④リハビリテーション期にある高齢者への清拭	1.学習のオリエンテーション ・20名ずつの2グループになり、1グループが④を実施 ・本日の学習目標の確認 ・学習進行についての説明 ・配布資料の確認	5
	2.資料による学習 ・高齢者に清拭を行う場合の留意点	15
	3.デモンストレーションおよび体験時間 ・学生1名を高齢者役、教員1名が援助者役として解説 ・皮膚乾燥保護剤として多種の入浴剤、皮膚保護剤を紹介 ・オムツ利用者への清拭方法	25
⑤義歯を使用している高齢者への援助	1.学習のオリエンテーション ・20名ずつの2グループになり、1グループが⑤を実施 ・本日の学習目標の確認 ・学習進行についての説明 ・配布資料の確認	5
	2.資料と模型による学習 ・加齢による口腔内の変化 ・口腔ケアの方法と義歯の管理方法 ・歯列模型および義歯模型を使用	25
	3.義歯洗浄のデモンストレーションおよび体験時間 ・義歯洗浄用ブラシ、洗浄剤などを利用して各自で実施	15

授業時間の半分で入れ替わる

2. 評価項目および測定方法

今回の体験学習における学習目標の達成を確認するために、分析には、以下の1)から3)の項目および測定方法を用いた。

- 1) 「学習目標についての理解の程度」として9つの質問項目について「かなり理解できた」、「まあ理解できた」、「あまり理解できなかった」、「まったく理解できなかった」の4段階の回答選択肢を設け、自分の気持ちに一番近い番号に一つだけ○をつける方法で測定した。
- 2) 「体験学習の時間および学習項目への満足度」として、それぞれ「不満」、「どちらかといえば不満」、「どちらかといえば満足」、「満足」の4段階の回答選択肢を設け、自分の気持ちに一番近い番号に一つだけ○をつける方法で測定した。
- 3) 「学習項目ごとへの意見および感想」として、学習項目①から⑤の5項目を昇順にならべて表記し、2.5cm×17.5cmの自由記載欄を設けた。

3. 分析方法

1) 分析対象

質問紙は、55名から回収された(回収率67.1%)。このうちの55名すべてが有効な回答であり、これを分析対象とした。

2) 順位尺度をもちいた項目の分析

「学習目標についての理解の程度」と「体験学習の時間および学習項目への満足度」については、順位尺度を用いた分析を行った。得られた回答の度数と割合をそれぞれ記述した。

3) 自由記載内容についての分析

「学習項目ごとへの意見および感想」における自由記載については、書かれた文章を何回も読み返し、学生の意図を崩さないように留意し抽出した。類似した内容を整理して、それを分類した。

V. 結果

1. 「学習目標についての理解の程度」と「体験学習の時間および学習項目への満足度」の結果

「学習目標についての理解の程度」と「体験学習の時間および学習項目への満足度」の結果については、表4および表5に一覧を示した。「全体的にみて、高齢者への援助について理解が深まりましたか」について、「かなり理解できた」という意見は36.4%、「まあ理解できた」者(61.8%)を含めると98.2%が理解できたと回答していた。特に学習項目③の学習目標である「看護目標と高齢者の日々の状況によって、移動・移乗の援助方法が異なることを理解できましたか」については、「かなり理解できた」者(41.8%)が高率であり、「まあ理解できた」者(56.4%)をあわせると98.2%の者が理解を示していた。また、同じく学習項目③の学習目標である「高齢者の身体的負担を軽減する援助方法が理解できましたか」については、「かなり理解できた」者(20.0%)と、「まあ理解できた」者(61.8%)を合わせると理解できた者は81.8%であった。

一方で、「高齢者の身体的負担を軽減する援助方法が理解できましたか」について「あまり理解できなかった」

表4 学習目標についての理解の程度

項目	人(%)			
	まったく理解できなかった	あまり理解できなかった	まあ理解できた	かなり理解できた
1.高齢者体験を通して高齢者の身体的特徴が理解できましたか?	0	3(5.4)	37(67.3)	15(27.3)
2.杖歩行の際の援助について理解できましたか?	0	7(12.7)	36(65.5)	12(21.8)
3.看護目標と高齢者の日々の状況によって、移動・移乗の援助方法が異なることを理解できましたか?	0	1(1.8)	31(56.4)	23(41.8)
4.高齢者のADL向上をめざす援助方法が理解できましたか?	0	9(16.4)	35(63.6)	11(20.0)
5.高齢者の身体的負担を軽減する援助方法が理解できましたか?	0	10(18.2)	34(61.8)	11(20.0)
6.援助者の介助負担感、被援助者の負担感を知ることができましたか?	0	7(12.7)	25(45.5)	23(41.8)
7.高齢者の清拭方法やその留意点が理解できましたか?	0	3(5.5)	40(72.7)	12(21.8)
8.義歯を使用している高齢者への援助について理解できましたか?	0	7(12.7)	31(56.4)	17(30.9)
9.全体的にみて、高齢者への援助について理解が深まりましたか?	0	1(1.8)	34(61.8)	20(36.4)

と回答した者は18.2%、「高齢者のADL向上をめざす援助方法が理解できましたか」について「あまり理解できなかった」と回答した者は16.4%であった。

体験時間については、「不満」と回答した者（7.3%）と、「どちらかといえば不満」と回答した者（54.5%）を合わせると61.8%が不満と回答した。学習項目については、「どちらかといえば不満」と回答した者は14.5%、「満足」と回答した者（27.3%）と、「どちらかといえば満足」と回答した者（52.7%）をあわせると80.0%が満足と回答していた。

2. 「学習項目ごとへの意見および感想」の結果

「学習項目ごとへの意見および感想」の結果については、自由記載の内容を1)「体験学習の実施方法や設定に関する意見・感想」と2)「体験した内容に直接関連する意見・感想」の二つに大別した。意見の内容をコード化しさらに分類した。学習項目ごとに意見の数を集計した結果を表6に示した。大別した二つを比較した場合、2)「体験した内容に直接関連する意見・感想」の方がどの学習項目においても意見が多かった。

記載内容を詳細にみると、1)「体験学習の実施方法や設定に関する意見・感想」については、時間や物品への意見、体験学習の設定や指導方法への提案が記載されて

表5 体験学習の時間および学習項目への満足度

項目	人(%)				
	不満	どちらか といえば 不満	どちらか といえば 満足	満足	無回答
1.体験学習の時間は、満足できましたか？	4(7.3)	30(54.5)	19(34.6)	2(3.6)	0
2.学習項目は、満足できましたか？	0	8(14.5)	29(52.7)	15(27.3)	3(5.5)

表6 学習項目ごとの内容に対する意見および感想

学習項目	1)体験学習の実施方法や設定に関する意見・感想		2)体験した内容に直接関連する意見・感想	
	分類	コード	分類	コード
①高齢者疑似体験	時間, 物品, 設定, 指導方法	32	骨格変化・視界・麻痺の理解, 心理の理解, 自己経験へのリンク, 高齢者看護への展望, 自己への気づき, その他	74
②杖歩行疑似体験と杖歩行の援助	時間, 物品, 設定, 指導方法	34	杖使用の理解, 心理の理解, 高齢者看護への展望, 自己への気づき, 社会への意見, その他	69
③車椅子を利用して高齢者をベッドから移動・移乗する援助	時間, 物品, 設定, 指導方法	32	状況に適した援助の理解, 自己への気づき, 援助者と被援助者体験からの学び, その他	61
④リハビリテーション期にある高齢者への清拭	時間, 設定	32	皮膚特徴の理解, オムツ使用時の清拭, その他	61
⑤義歯を使用している高齢者への援助	時間, 物品, 設定	17	歯と加齢の理解, 義歯取り扱いの理解, 口腔ケアの理解, 心理の理解, 自己経験へのリンク, 高齢者看護への展望, その他	83

いた。時間については、“時間が足りなく全部できなかった”など、体験学習の時間不足が指摘されていた。授業時間外に教員が指導に当たることを学生に説明していたことについては、“授業外の時間を利用するとよいが、そこまで熱心になれないので反省している”、“後から取り組みたいが、他の授業の課題もありできない部分がある”など、授業時間外のゆとりがないために体験ができなかったという意見が書かれていた。物品については、“装具の数が少ないので効率が悪かった”、“ベッド数を増やして欲しい”など、物品数の不足が指摘されていた。体験学習の設定や指導方法への提案には、学習項目①の高齢者疑似体験では、“さらに重い錘をつけた学習がしたい”、“グループをさらに少人数にして欲しい”、“高齢者の聴力を体験したい”などが書かれていた。

学習項目②の杖歩行疑似体験と杖歩行の援助では、“教員が学生1人に説明していると他が質問しにくい”、“教員が説明しながら見てくれるので分かりやすかった”、“実際に外へ出ると新しい発見がありそうだ”などの意見が書かれていた。

学習項目③の車椅子を利用して高齢者をベッドから移動・移乗する援助については、“教員数を増やして欲しい”、“プリントが文字だけでなくイラスト入りで演習中に気がついたことをメモするなど有効活用できた”、“ベッド不足で待つ間に復習できる演習があるとよい”などの意見が書かれていた。

学習項目④のリハビリテーション期にある高齢者への清拭については、“デモンストレーションではポイントを一つ一つ説明されるのでよく分かった”、“オイルなどを含めリラクゼーションしながら行う工夫も考えたい”、“麻痺装具をつけて演習するとよい”、“基礎などと同じでおもしろくなかった”、“基礎で行わなかった知識があり分かりやすかった”などの意見が書かれていた。

学習項目⑤の義歯を使用している高齢者への援助については、“義歯の装着をやってみたかった”、“汚れた義歯を磨く演習がしたい”、“歯の模型などを見て説明を聞くことができたので理解がしやすかった”、“もっと実践的な口腔ケアを聞きたい”などの意見が書かれていた。

次に、2)「体験した内容に直接関連する意見・感想」について学習項目①では、“下肢装具では、自然に前傾姿勢になり腰を落としてガニ股に立たないとバランスがとりにくいことがわかり、高齢者がなぜあの姿勢になるのか理解できた”、“前のめりで立っていても不安定な上に、視力低下、筋力低下のために転倒の危険性が高いことが

体感できた”など加齢によって関節が変化し、高齢者の姿勢が変化した設定の装具装着体験や、高齢者の視界の体験を通して、高齢者の歩行には転倒のリスクが高いことを実感したという意見が書かれていた。また、“高齢者装具は、思っていた以上に動きにくく、高齢者の苦勞の気持ちが少しわかった”など、このような特徴を持ちながら生活する高齢者の心理へ考えを深めたという意見や、“高齢者の歩行援助の時は、自分が体験してわかったことをいかそうと思った”など高齢者看護を行うときの自身の心構えを述べた意見が書かれていた。さらに、“高齢者が普段から、あのような感覚で生活していることを思ってもみなかった”など体験を通してこれまでの自分の理解が頭の中だけであったという自己反省や、自身の祖父母の特徴を振り返り“私の祖母も布団から立ち上がるのに大変だったのだと思った”と何気なく見過ごしてきた事柄を思い出すものや、“高齢者体験から、高齢者に対する考え方や看護が変化していくと思う”といった自己への気づきも書かれていた。

学習項目②では、“体に合わない杖は、歩きにくいだけでなく転倒の危険などがあることがわかった”、“思っていた以上に杖歩行は大変だった”など、杖を使用することが便利だけでなく、正しい使い方を行わないとかえって危険であることや、杖を使用することが予想以上に筋力を要することなど、杖歩行疑似体験からの学びや、“健康な自分たちでも怖いので、高齢者にとっては転倒の恐怖心があると思った”など、杖を使用する側の身体的な負担から高齢者の心理的な影響を考える意見が書かれていた。また、“最終的には、転倒を防ぐ立ち位置にいればよいということがわかった”といった高齢者看護への気づきや、“杖は、少し体を支える程度のものだと思っていました”など、自己への気づきが書かれていた。さらに、“公共の場のエスカレーターやエレベーターは必要であると思った”など社会への意見や、“杖について考えたことがこれまでなかったが、様々な種類とその長所・短所があることを知った”など杖の種類とその使い分けを知った感想が書かれていた。

学習内容③では、“対象が同じでも、その日、そのときの状況や体調によって介助の内容が変わることをあらためて感じさせられた”、“高齢者の身体的な特徴を把握した上で慎重な援助が必要であると思った”など、多様な生活様式をもつ高齢者に対して、画一的な援助方法を提供するのではなく、高齢者のその時々状況に合わせ考えながら援助方法の選択を行い、確実に実践する必要性

について理解したという意見が書かれていた。しかし、
 “頭で流れを理解していても、実際に行ってみるとでこずってしまい、うまくいかないことが多かった”と必要性については理解できたが、今回だけでは技術の習得について課題が残る意見もあった。また、被援助者である高齢者役と援助者役の両方を体験したことから、“成人を援助する場合よりも負担が大きいと思った”と介護をする側の負担感について考えた意見や、“高齢者の役を体験してみて部分介助を受けるのと、全介助を受けるのでは負担感が違っているとわかった”と介護を受けなくてはならない側の影響について感想が書かれていた。

学習内容④では、“高齢者は皮膚が薄く、保水力がないので入浴剤や、清拭後のローションなどの使用による工夫をして乾燥を防ぐ援助をしたいと思った”、“成人と違い、高齢者は皮膚が弱いので、そこに配慮しながら行うことが大切”など、高齢者の皮膚の特徴について理解が深まったことが書かれていた。また、“オムツの種類についていろいろなものを見ることができてよかった”と高齢者に適したオムツの使用法や“オムツを嫌がる人がいると言うことがわかった”など、オムツ着用者への援助についての学びが書かれていた。他には、“様々な入浴剤や石鹸を使用することができ、清拭にもいろいろな方法があることを知った”など、入浴剤やローションなど皮膚保護へ工夫を凝らすことへの学びや感想が書かれていた。

学習内容⑤では、“加齢にともなう口腔の変化や口腔ケアの意義や目的を理解できた”、“歯の老化現象に合わせた口腔ケアも理解できた”など、歯と加齢の理解、義歯の取り扱いや口腔ケアに関する学びが書かれていた。“義歯に触ったことがないので、新鮮であった”など、義歯そのものを初めて手にしたという意見や義歯に触ったことへの喜びや感想も書かれていた。“老人の精神面への配慮がいかに重要かということ深く考える内容でいい学びになった”など、義歯を使用することが高齢者の心理へも影響を及ぼしていることなどを知り、心理面への配慮についても学びが書かれていた。さらに、“義歯に関する知識を本人に指導することも大切であり、家族にも知ってもらわなければならないことがわかった”と義歯を使用する高齢者だけでなく、その家族への看護が必要だという意見も書かれていた。“祖父母が義歯を使用しているので見たことはあったが、じっくり観察することはなかったのでよかった”と自己の経験へリンクさせた意見もあった。

VI. 考察

1. 体験学習を通じた高齢者理解と学習効果

今回、我々は新しい学習項目の追加と多種の体験を組み合わせた体験学習を行った。体験学習としての効果は、先行研究と同様に学生がこれまでの講義や自身の経験の中だけで理解していた高齢者像を、さらに深まった形で理解したことであったと考えられた。

まず、「学習目標についての理解の程度」の結果から、今回の体験学習において、全体的な高齢者援助への理解については、98.2%の学生が理解の深まりがあったと回答していた。学生自身にとって学習目標が「理解できた」と実感できる機会を提供したことは、高齢者看護への関心を高める契機につながるとも考えられ、今後の学習意欲の維持・向上が期待できる。各学習目標で見た場合においても、すべての目標において8割以上の学生が理解できたと回答しており、このことから体験による学習は学生の実感として効果があったと考えられた。

次に、「学習項目ごとへの意見および感想」の結果からは、体験学習の設定や指導方法について提案がいくつかあげられていたが、それらは体験学習に対して意図的であると読み取ることができる提案であった。

また、先行研究において体験学習の効果は、学生が高齢者の身体理解だけでなく、心理的側面に着目すること¹³⁾、現時点での自身の高齢者像を自覚すること¹⁾、高齢者に対する自己のとらえ方について変化があること³⁾から読み取られていた。「体験した内容に直接関連する意見・感想」を見た場合、体験を通して、身体だけでなく心理的な側面への気づきや、高齢者の姿勢や歩行、皮膚や義歯など、これまで高齢者の生活に触れながらも注目したことがなかったという自分自身の高齢者像を自覚していた。さらに高齢者看護について言及した意見は、これまでの高齢者像が今回の体験学習を通して変化し、自分自身の看護のあり方を変えなくてはならないと考えた結果であると考えられた。このような視点で見た場合、今回の体験学習は学習効果があったと考えられた。

また、「援助者の介護負担感、被援助者の負担感を知ることができる」という学習目標については、先行研究と同様⁵⁾、疑似体験中に感じた介護者としての疲労感があったゆえに援助者と被援助者体験からの学びが書かれたと考えられた。

2. 体験学習を通じた高齢者理解への課題

今後の教育課題として、時間不足および物品不足が考えられた。しかし、時間や物品については、容易に変更できる状況にはない。我々は、事前にこの事態を予測し十分な体験が行えなかった場合には、授業時間外に教員が指導に当たることを学生に説明していたが、学生からは、授業時間外のゆとりがないために体験できなかったという意見があり、限られた時間内に十分な体験学習を提供することが課題であると考えられた。そのためには今回の体験学習計画をさらに効率性を高めるように工夫する必要があると考える。この効率性を高める工夫の一つとして、我々の計画の工夫に加え、学生の学習に対する能動性や積極性を高めることも考えられた。

また、今回の体験学習のうち「高齢者のADL向上をめざす援助方法が理解できる」ことや「高齢者の身体的負担を軽減する援助方法が理解できる」という、より実践的で応用につながる看護の理解については、他の学習目標と比べ「あまりで理解できなかった」と回答したものが多かった。これは、対象を2年後期の学生としたため、学生の学習レディネスを考慮し、まずは学生が高齢者を理解することに焦点を当てた教育となった結果であると考えられた。これについては、3年次の老年看護学方法論で具体的な高齢者への看護援助を学習する段階の時に、さらに実践的な学習を強化し、学生が応用できるような学習をめざしたい。さらに、4年次の老年看護学実習における高齢者への看護実践を通して、実体験を通じた理解が進むように学習効果を高めたい。

また、学生が自己への気づきを得るためには、体験学習を実施した後で、体験の学びを学生同士で討論し学びを共有することや、具体的に感想や評価を書く機会を提供することで、学びの広がりや深まりがさらに得られるのではないかと考えられた。

VII. おわりに

本報告では、今回行った体験学習の学習効果の検討と今後の教育課題を述べた。体験学習は、高齢者の身体的特徴に関連した動きの不自由さや危険性の高さを実感する機会となり、このことが高齢者の心理への理解にもつながっていた。高齢者の立場になる体験を通して、学生はそれまで持っていた自己の高齢者像を自覚し、その自覚から援助者としての姿勢を問い直し、高齢者に必要な看護の理解を深めていると考えられた。高齢者役と援助

者役の役割を交互に行う体験学習では、援助される側の心理と援助する側の負担を同時に体験でき、高齢者の気持と介護者の気持ちを考えるきっかけとなっていた。

引用文献

- 1) 佐藤弘美, 永江美千代, 黒田久美子, 正木治恵, 野口美和子: 老人理解のための体験学習—INTO AGING—. 看護展望, 18(8): 32-36, 1993.
- 2) 竹内美由紀, 横川絹恵: 体験学習による学習効果—高齢者疑似体験記録の内容分析を通して—. 香川県立医療短期大学紀要, 2: 107-114, 2000.
- 3) 清水初子, 水戸美津子, 流石ゆり子: 老年看護学における教育方法としての体験学習—「高齢者疑似体験」学習に関する文献分析から—. 山梨県立看護大学紀要, 2(1): 73-85, 2000.
- 4) 清水洋子, 小野奈津子, 福島道子: 看護学生における高齢者疑似体験の取り組みと学習効果—インスタント・シニア・プログラムを導入して—. 日本在宅ケア学会誌, 4(3): 55-61, 2001.
- 5) 橋本文子, 松下恭子, 多田敏子: 看護学生を対象とした高齢者疑似体験学習の意義—高齢者および介護者体験からの学び—. 老年看護学, 7(1): 95-102, 2002.
- 6) 鳴海喜代子, 田中敦子, 伊藤道子: 老年看護学における高齢者理解のための教育方法の検討—看護学生の情緒的理解を促す教材の活用—. 老年看護学8(1): 70-77, 2003.
- 7) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子: 看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に—. 老年看護学, 4(1): 98-104, 1999.
- 8) 小泉美佐子, 伊藤まゆみ, 宮本美佐: 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果. 老年看護学, 5(1): 140-146, 2000.
- 9) 谷井康子, 迫田綾子, 岩切桂子, 安楽和子, 長谷川浩子: 看護実践能力を高めるための学内演習の実際: 老人看護学. Quality Nursing, 8(10): 38-45, 2002.
- 10) 寺門とも子, 大塚邦子, 石松直子, 平川オリエ: 高齢者理解のための効果的な学習方法—看護学生の個人史インタビューによる人生観・健康観の学び—. 老年看護学, 7(1): 88-94, 2002.
- 11) 野口美和子: 老人看護学再考—自我発達の視点から. Quality Nursing, 3(10): 4-9, 1997.